

Title	Gordon Leff, Paris and Oxford Universities in the thirteenth and fourteenth centuries
Sub Title	
Author	坂口, 昂吉(Sakaguchi, Kokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.3 (1970. 12) ,p.123(517)- 125(519)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19701200-0123">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19701200-0123</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 批評と紹介

Gordon Leff

Paris and Oxford Universities in the  
Thirteenth and Fourteenth Centuries  
New York・London・Sidney, 1968, pp. 331.

坂口昂吉

本書は中世最古の大学のうち特にパリとオクスフォードをとりあげ、両者の特色を制度史及び思想史的面から対比しつつ敘述したものである。

まず制度的面から両大学を比較してみると、パリがその創立当初から、司教座や市当局、後には托鉢修道士や教皇庁を相手どって自立確保のために死闘を繰返しているに反し、オクスフォードは比較的平穩無事な発展を示しているという。著者によれば、この理由の第一は、パリ大学が司教座直属の学校から出発したため独立が困難であったに對し、オクスフォード大学が遠くにあるリオンカーン司教座の緩い監督下にあった故である。また第二の理由は、パリ大学がヨーロッパの学問中心地として自他共に許す高い矜持を有したため、托鉢修道士など他者を容易にいれず、また外部からの干渉や侵入に敏感であったのに對し、オクスフォード大学は片田舎にある篤学者の溜り場ともいった感じで、余り烈し

い排他意識をもたなかった故である。さらに第三の理由は、教皇庁にとって、パリ大学を抑えることが地理的距離の近さからしても文化的意義の大きさからしても重要な関心事であったに反し、僻遠の地にあっても眼立たぬ存在であったオクスフォード大学はそのような対象になりえなかった故である。したがってオクスフォード大学の主たる関心は、市当局との争いにおいて、英国王から特権を保障してもらうという極めて地方的なものに限られたのである。

また教育課程については、神学中心主義をとり、十二世紀ルネサンスにみられる古典文学重視を排してアリストテレス哲学の研究が圧倒的に進出していることは、両大学に共通の特色といえよう。しかし、十三世紀前半のアリストテレス哲学流入期に、教皇庁がその自然学・形而上学関係の書物に對して再三だした禁令は、両大学の異なる反応の故にその教育課程に相違を生みだした。即ち教権の圧力を真向から受けたパリ大学は、教会の公認する論理学に偏した傾向を示し、神学に従属するが新しい抽象的な形而上学体系を創造していった。これに反し、教権から比較的独立していたオクスフォード大学は、ロバート・グロセテストの努力と相俟って経験を重んずる自然学研究を發展させた。しかしこのような自然学研究が、体験的神秘的傾向を重んずる点で、伝統的なアウグスチヌス主義の神学体系と併存していたことは注目を要する。

なお各学部組織については、神学部・医学部・法学部な

ど上位学部における相違はさしたるものではない。パリ大学に教会法学部しか設置されなかったのに、オクスフォード大学では世俗法学部も置かれていたという程度のことである。しかし人文学部については、類似している点も多いが、顕著な差異もみられる。それは、オクスフォード大学の教授候補者が *inceptio* (就任公開講義) を行うのみでよく、*cancellarius* (司教座書記官長) から別個に *licentia docendi* (教授資格) を得るための試験をされなくともよかったことである。これはオクスフォード大学の *cancellarius* が、パリ大学におけるその如く司教座を代表して教授の組合と対決する関係になく、むしろ完全に大学内の役職者であったからである。

だが本書の面目躍如たる所は、むしろ後述の両大学における思想的潮流の把握にあると考えられる。ここで特に注目すべきは、一二七七年、パリ司教エチエンヌ・タンピエによってなされた二百十九箇条のアリストテレス禁令に対する歴史的把握である。この法令は、一般にアヴェロエスのアリストテレス主義に対する禁令であるとされているが、わずかながらトマス主義の主張も含まれているためその解釈をめぐって従来必ずしも諸説の一致をみていない。しかしここに著者が下した判断は、その当否はともかく広大な視野からみた独自の綜括であるといえよう。即ち、ここに禁じられた箇条は、アヴェロエス主義的立場から信仰の基礎を攻撃したというようなものではなく、単に自立的な哲学の主張にすぎぬ。だがまさにその点にこそ教会当局者からみて危険があったの

だ。それらは単に神学的真理と矛盾する思想体系を示したのみでなく、異なった真理の規準を提示したのである。それを従来の如く二重真理説と呼ぶかどうかは大した問題ではない。肝要な点は、それが真理の規準を自然的理性と自然的経験に置いていることである。しかしこれを容認することは、神学を玉座から引き降すことを意味したのだ。そうである以上、教会の当局者は、アリストテレス哲学のもたらしたすべてを撤回せざるをえなかったのである。結局、一二七七年のパリにおける禁令は、一二四〇年から一二七五年にかけて進められてきた信仰と理性、クリスト教的啓示とアリストテレス哲学を調和させようとするすべての試み——トマス主義・アルベルトゥス主義・アウグスチヌス主義——の挫折を示すのである。それは何ら新しい思想の出現ではなかった。ただ神学と哲学のスコラの綜合の崩壊の開始であったのだ。以後の思想家たちの試みは、すべてこの失敗に対する反動として理解されるべきである。この中には、アンリ・ド・ガン、ドゥンス・スコトゥス、なかんずくオッカムが入る。オッカム主義の唯名論は、神学と哲学の綜合に失敗したクリスト教思想家たちが、その対応策として、啓示と理性に属するものを明確に鑑別しようとしたものである。

これに似たアリストテレス禁令が、一二七七年、オクスフォードでもロバート・キルウォードにより発布された。だがその内容は、トマス主義を主たる敵として狙っている点で異なっている。著者はこの事件をパリ禁令とは全く性質の違ったものとして

扱っている。即ち、オクスフォードではロバート・グロセテスト以来、伝統的なアウグスチヌス主義が圧倒的に優勢であった。したがってこの禁令は、アウグスチヌス主義のトマスのアリストテレス主義に対する抵抗であり、単なる学派的衝突にすぎず、パリ禁令の如く信仰と理性の調和の試みの全面的挫折というほど一般的意味をもつものではないという。なお著者は総合的体系としてのアウグスチヌス主義が去り、オッカム主義が栄えるに到った十四世紀のオクスフォードの学風を、その論理学・数学・幾何学等の面での業績を評価しながらも、単なる経験を越えて実験にまで進むとしなかった点に限界があるとしている。

このほか、十三世紀中葉よりパリで行われた在俗司祭と托鉢修道士の清貧をめぐる論争が扱われている。著者はこの論争を、それ自体としては両者の生活用式の相違に発するものにすぎないとするが、その中世末の宗教運動や教会論に与えた影響は軽視できないとしている。即ちヨアヒム主義の影響をうけたフランシスコ会の会則厳守派、フラティチェリ、ヴァルドゥス派の過激な教会改革論を生みだしたばかりでなく、ダンテ、パデューアのマルシリウス、オッカム、ウィクリフ、フスらにおける、一切の世俗的富と特権を捨てた教会像の形成に関係した意味においてである。

以上が本書の概要である。なお中世の大学史については、基本的研究として、H. Denife, *Die Entstehung der Universitäten des Mittelalters bis 1400*, Berlin, 1855; H. Rashdall, *The Universities of Europe in the Middle Ages*, ed. by

F. M. Powick and A. B. Emden, 3 vols, Oxford, 1936 (横尾 壮英訳「大学の起源」東洋館出版社)がある。本書もその制度史的面においては、この両著作に依拠している所が多い。ただパリ大学とオクスフォード大学を鮮かに対比して敘述している点に特色がある。また思想的側面については、著者独自の見解が汪洋しているというべきであろう。それも単に本書における史料渉獵のみでなく、多年にわたる中世末期思想史の個別研究によって裏打ちされているのである。著者は現在ヨーク大学の講師であり、代表的著作として次のようなものがある。Bradwardine and the Pelagians, Cambridge, 1957; Medieval Thought from St Augustine to Ockham, London, 1958; Gregory of Rimini, Manchester, 1961; Richard Fitzalph, Manchester, 1963; Heresy in the Later Middle Ages, 2 vols, Manchester, 1967.